

鳩木節子の後日
甘木数彦

第二章

四

節子たちの経験によれば、ヨ号組織が展開する作戦としてのうわさ話は一定のパターンに沿った振る舞いをする。

まず短期間に無数のバリエーションが生まれ、やがてそれらは食い合ったり競合したりしながらバリエーションの数を減らして集束する。具体的には語られなくなったり、いくつかの話が一つにまとめられたりするのだ。

そして最終的に残った一話が現実のものとなる。範囲が広く、初期段階のバリエーションが多いほど、現実化したうわさ話の力は強いものになるようだった。

噂について箝口令を敷くことができない以上、節子たち「ヨ号組織対策委員会」の人間は目立たない形でなるべく噂が広まらないようにすることで、現実化するものが少しでも弱くなるようにしていた。そのためのノウハウを有したプロジェクトチームがあったのだ。

その上で、現実化したものを節子が抹殺する。しかし今回は今までと違う点が多いため、もし現実化したとしてもどういうものが出てくるのかまったく予測はできない。

土曜日に仮くら井へ行くと、節子は伊助との会話やこうした基本的な考えを香奈に説明した。

「それじゃあ、化けネコが現実化するまで待つしかないってこと？」

香奈は不服そうだった。待つ、ということが性格的に嫌いなのだ。

「昨日、考えてみたんです。私知ってるだけでも噂にはもう六種類のバリエーションがあります。実際にはもっと多いと思いますし、商店街の人の四割くらいは実際に化けネコを見ているはずですよ。これはなんて言うか、バリエーションの密度としてもかなり濃い分布なので、それも気掛かりです」

化けネコの話を知ってくれる人が香奈と汽一郎、忠晴しかいないことに気付いて少し寂しさを味わったことは伏せて、節子は言った。

「それって、どういうこと？」

「どういう、ってわけでもないんですけど」

香奈は「ふーん」と言うと、急に人の悪そうな笑みを浮かべた。

「それにしても、あんた燃え尽きたんじゃないかって？ 今日のはなんだかやる気に満ちてるみたいだけど？」

途端に、節子は顔が紅くなるのを感じた。

「いえ、その、こういうことは習慣的に放っておけなくて」

「そおおお？ 節子ちゃんって意外に好戦的なんだ？ 知らなかった」

「違います」

ムキになる節子が面白かったのか、香奈は笑った。

「まあ、いいから。で、私は何をやるのさ？」

伊助の言葉どおり、香奈は乗り気だった。不信感もまるでなく、その適応の早さは却って不自然だった。やはり普通の人ではないのだろう。

「とりあえず、噂を積極的に集めてください」

「それだけ？」

「そう、です。変異の可能性もあるんで。って言ってもなんだか解りませんよね」

かつて一度だけ、初動が遅れて噂の規模が巨大になってしまったことがあった。そのときに変異が発生した。

もともとは電話を介して伝染する不気味な声を巡る噂群だったのだが、それが具体的な姿を帯び、不気味な声の話から怨霊の話へと変異してしまったのだ。

その怨霊はかなりの物語性や他の噂では見られないほどの細かい設定を与えられ、そのぶん力も強かった。実際に七人の死者も出た。

「ひょっとしたら、今回も同じ事が起こるかもしれません」

「あ、もう、遅いかも」香奈は些か慌てたような声で言った。「ケンスケが猫女を見たって話があるから。変異ってつまりそういうことでしょ？」

昨日のことだった。スーパーで働く相田健介は猫女に出会った。大きさは普通の猫と変わらないが、顔や前脚に人間を思わせる特徴があったのだという。

猫女は捕まえた小鳥を食い散らかしていたが、健介を見ると口元に笑みを浮かべて「あなたがエバラショウヘイサン？」と尋ねてきたのだという。健介が否定すると猫女は興味を失ったらしく、食べかけの小鳥をくわえて路地裏へ走り去ったのだそうだ。もちろん、商店会にエバラショウヘイという人物はいない。

「そうですね。それは変異です」

話を聞き終えた節子は断言した。

「変異が起こると、どう違ってくるの？」

「さっきも言ったように、現実化したものの強さも大きく変わってきます。負けることはないでしょうが、苦戦するでしょうね。それ以外は何とも。」

香奈は少しのあいだ思考を巡らせていたが、やがてひとつのアイデアを思い付いた。

「それってさ、今回は食い止められるかも。だってさ、ケンスケでしょ。とにかくそのことは喋らないように、私から言うことはできるよ。あいつ真面目だし、小中高と後輩だったし、私のこと好きだって噂も高校時代にあったし。ちょっとケンスケのところに行く」

節子に留守番を言い渡すと、香奈はそのまま店を出て行った。

残された節子は、香奈の発想に軽い衝撃を受けていた。たしかに今回の対象範囲は不特定多数ではない。特定少数なのだ。上手くいくとは思えないが、その気になれば商店街に住む人間全員を一箇所に集めて事情を説明し、化け猫の話はいっさいしないように頼むことも可能だろう。

これまでの経験から先入観に縛られていたことを節子は反省した。同時に、すぐ店を出て行った香奈のことが頼れる姉のように思えた。

しばらくして、香奈が戻ってきた。

「気味の悪い話はしないようにって言って、いちおう約束はしてくれたけど……。もうけっこう喋っちゃったって」

「そうですか」

「まあでも、この線はいけるんじゃない？ 毎晩フライングエイブに行つてさ、化けネコ

の話に否定的な反応をすれば」

「よく解らないんですけど、それって気まずい感じになりませんか」

「あ。なる。なるなる。でもさ、そんなこと気にしてる場合じゃないでしょ」

正論だった。しかし、節子はやはり抵抗感を捨てられなかった。

香奈にとって商店会の人々と友好的な関係が続くというのは、自明のことなのだ。だからあっさりとなんか言える。しかし、よそ者の節子からすれば、なんとも気の重い話だ。他に行き場のない現状では特に。

「とりあえず、現実化するまで放っておきませんか？ かえって煽る結果になっても困りますし」

香奈は腕を組んで迷っているふうだった。

「それってさ、一つ質問なんだけど、危険とかないの？ もうはっきりした目撃者もいるんだから、ある意味では現実化してるってことでしょ」

「仮説ですが、他の人も香奈さんと同じプロセスを辿ってるんじゃないかと。つまりですね、みんな誰かから見たんでしょうと指摘されると、そこで目撃の記憶が生まれて肯定してしまう、と。それなら実際にはまだ現実化していないはずですし、実際的な危険はないでしょう」

香奈は納得しきれなかったようだが、他にいい案もないようで黙っていた。

その晩、店を閉めた二人は「フライングエイブ」に立ち寄った。いつものように汽一郎が集めた年代物のイスは常連客で埋まっていた。

フライングエイブの店内はできる限りのものが六〇から七〇年代のアメリカで使用されていたものに統一されていた。アメリカではちょっとした骨董品にあたるわけだから、汽一郎も結局は忠晴と同じようなことをしていると言える。

節子たちは鮭の燻製をあしらったシーザーサラダを肴に、安いハウスインを飲んでいった。大きなデカンタに注がれた白ワインは甘みが強く、飲みやすいせいで見る間に減っていった。

隣の席では、岩谷浩平と遠藤陽介、山藤秋美が喋っていた。三人とも美容院で働いている。かなり酔っているらしく、三人の話し声は隣の席までよく聞こえた。

話題は化け猫のことだった。それはいったいなんなのかという話をしているのだが、酔っているせいで話題は脱線を繰り返して、一向に前進しない。

「香奈さんもこの前見たんスよね？」浩平が急に話しかけてきた。「オレも見たんですよ」

浩平はアルコールにややうわずった声を出す。もともと酒に弱いせいで、照り返るほど赤くなっている。

「見たって、なんのこと？」

香奈は受け流そうとしたが、浩平は気にせず先を続ける。

「さっきゴミ出しに行ったら、ゴミ捨て場に野良猫がいたんスよ。先割れって言うか、その猫、頭から背中くらいまで二つに裂けてるんですよ。でも内臓とか血とか出てなくて、内側もちゃんと毛が生えてる。目なんかも真っ白く濁ってて。俺に気付いたそいつは急に飛びかかって、オレのこと引っ掻いて逃げてったんですよ」

浩平は左腕をかざした。確かに腕の外側の手首から肘にかけて、猫に引っかかれたような

赤いスジが二本ある。ところどころ乾いた血がはがれて、緋色の肉が見えている。

香奈の判断は素早かった。浩平の傷のすぐそばを軽く叩いて笑ったのだ。

「ちょっと冗談やめてよもう。信じそうになったじゃない。あれでしょ？ どっかに引っ掛けた傷なんだよね」

「いやいや、マジですって。だってほらこんな」

浩平は少し慌てていた。

「また冗談。私は信じないからね」

その言葉と目つきにはこれ以上の反論を許さない迫力があつた。

浩平は戸惑いの表情からうつろに周囲へ視線をさまよわせ、やがて笑みを口元に浮かべた。

「そうそう。そうなんスよ。やっぱり香奈さんにはバレちゃいますね」

そう言ってだらしなく笑う。

「なにちょっと嘘だったの？」

二人の会話を聞いていた秋美が浩平を叩くフリをする。

「あたりまえだろ。そうそう化け猫なんか見ないっつーの。これはほら、事務所の机が壊れてんじゃない？ カドのそこ。あそこに引っ掛けてさ」

「焦ったー。ついに来たかって感じだったんだけどね」

陽介が大げさに言う。なんとなくそれで座の雰囲気が変わってしまい、三人の話題は店のことへ移っていった。

「あの、いま、なにが」

節子はわけが解らないままに、声を潜める。

「私のときの応用。もしあいつが私と同じ状態なら、化け猫の話をしながらいまいち自分の記憶に自信が持ててないはずだから、強く否定してやったの。はっきりとね。それで、たぶんまだおかしいとは思ってるんだろうけど、あいつは私の言うことを本物の記憶として認めた。自分の記憶よりもね。いやあ、上手く行ってよかった」

香奈は声を落として説明すると、汽一郎にフライドポテトとフライドチーズを注文した。地味だが素材や揚げ方を汽一郎が突き詰めた結果、かなりのレベルに達した人気メニューだ。

「でも、化けネコが目撃されたことに変わりないじゃないですか」

節子が反論する、という事態が面白いのか香奈は満足そうに微笑んだ。

「要はさ、記憶とか情報とかうーん。細かいことは省くけど、よく解らないし」そこで香奈は言葉を切り、運ばれてきたフライドポテトを口に運ぶ。カリカリの衣を噛む頬が柔らかくうごめく「とにかく大きい声で先に断言した方が事実になって勝つわけ」続いてチーズを口にする。「結局これってさ、ある話がさんざん既成事実として扱われたときに現実化するってことじゃない。なら、それを不十分な状態にしておけばいいってこと。それより」急に香奈は口調を厳しくする。「危険はないはずだったんじゃないの？ 大きい化けネコの話ってあったけど、あれだって考えてみれば、もしじゃれつかれでもしたら死ぬよ？」

問い詰められた節子は何か答えようと思うのだが、焦りで言葉が出てこない。

「これまでどうだったのかは知らないけど、死人が出ましたはいごめんなさいじゃ済まな

いわけ。ねえちょっと解ってる？」

「すみません」

節子は辛うじて聞こえる程度で謝る。

「お！ 香奈さんさっそく新人をイビっちゃだめッスよ」

隣の席から浩平が言う。香奈は身を乗り出すと、隣の浩平の頭をこすいた。かなり大きな音がする。

「イタッ」

「痛くない！」

「いやまあ、そうですけど。ちょっともうやめてくださいよ」

泥酔した陽介と秋美はそれを見て笑った。浩平自身も笑い出す。

「ね？ 大声で断言した方の勝ちでしょ？」

早くも赤らんできた手指を撫でながら、愉快そうな声で香奈は節子に言った。節子は少しぎこちないながらも同意する。

「はい。それと、あの」

「解ればいいって。ま、私もあんたの事情は知らないわけだし」

その後、節子は隣の三人に紹介され、五人で飲むことになった。アルコールが効かない節子も酔っぱらい四人のテンションに取り残されないよう、控えめながら精一杯に明るく振る舞った。同時に時間が経つほど、香奈の妙な飲み込みの良さや適応力を不思議に思う気持ちが強まっていった。

不意に何匹もの猫が声を揃えて鳴いた。長々と尾を引いて、ゆっくりと寄せては返すような鳴き方だ。しかしそれが聞こえたのは、人間を超える節子の聴覚だけだった。節子は周囲の人間に気付かれないよう注意しつつ、猫たちの声に耳を傾けた。

猫の声は少しすると、唐突に消えてしまった。

「どうしたの？」

香奈が節子の顔に自分の顔を寄せて尋ねる。

「いえ、なにも」

節子はそう言うとグラスを手に取り、中身を飲み干した。

「あ、何か頼む？」

香奈に向かってうなずくと、節子はメニューを手に取った。いま耳にした鳴き声が自分の中で整理されるまで、少しだけ時間が欲しかったのだ。

四人はメニューに見入る節子の傍らで、何事もなかったかのように談笑を続けた。

提供：ハムカツ屋

<http://www.hamkatsuya.com/>